

## 授業力・教師力の守破離

# 自分の力で教科書と対峙して使う

連載①

大阪教育サークルはやし 荒井 賢一

### 授業力・教師力の守破離とは

授業力にも教師力にも、それらの力をつけていくための筋道があり、その上達論を守破離という形で表してみよう。

まず、「守」を考えるために、次の段階の「破」から考えてみる。

「破」とは、自分の殻を破って、新しいやり方をするということである。

何を破るのか、これまでのやり方・これまでの考え方である。

「守」は、逆に殻が割れる前の状態、または、地面に根が張る状態を指す。

植物は、根を深く広く張らなければ、風雨（逆境）によって、簡単に倒れてしまう。

それは、教師も同じといえるだろう。

自分の教師人生を支えるだけの土台を「守」の段階で築く必要があるのだ。

「守」ができていなければ、そもそも破るべきものがないので「破」もない。

また、殻を一回二回破ったからといって、

新しいやり方、新しい自分にはならない。

何度も何度も殻を破る。たくさん脱皮をくり返して、ようやく「離」となる。

「破」の回数が少なければ、その「離」は本物ではない。すぐ揺らぐことだろう。

「守」がしっかり築けていたなら、「破」や「離」で困ったことがあっても、「守」を思い出して立ち直ることができる。

### まずは教科書を使って授業する

具体的な四教科（国算社理）ならば、「守」の段階として、教科書を使って授業をしていくのがいいだろう。

教科書は、多くの専門化の知恵が集約され、さらに、文部科学省の厳しい検定にも合格している。

もちろん、教師の見識が高まれば、教科書の不備も見えてくることだろう。

それでも、教科書レベルに届くような教材・教具を教師自身が創り出すことは、至

難の業といえる。

未熟な教師が作った粗悪な教材・教具が、子どもたちを苦しめることもある。「情熱をかけて創意工夫したものだから、すばらしい」なんていうのは、幻想・妄想にしかならない。

### 自分と教科書との対峙を大切に

教科書を使って授業をする上で守ってほしい（挑戦してほしい）ことは、**赤刷りの教科書や指導書を見ない**ということである。

まずは、子どもと同じ目線になって、自分自身が教科書と対峙していくことが大切になってくる。

分からない言葉があれば、自分でどんな意味か想定しながら、辞書やネットで確かめ調べてみる。音読してみる。ノートに視写してみる。発問を考えてみる。

指導書には、言葉の意味や教え方が書いているだろう。結構、役には立つが、すぐさまそれを見てしまうと、あなた自身の教師の力にはなっていない。

自分で根を張ることに意識してほしい。